世界は二人きり…？

kiskfragment

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
世界は二人きり…？

【Ｎコード】
Ｎ２２１８Ｚ

【作者名】
ｋｉｓｋｆｒａｇｍｅｎｔ

【あらすじ】
時間が止まった世界。
僕と君しかいない、二人だけの世界。
内側の世界にに閉じこもったきり部屋から出てこない君は孤独で、
外側の世界に取り残された僕も孤独。
二人きりの世界で取り残された僕たちは、これからお互いをどう感じて、どのように過ごしていく？

プロローグ…？

今日も孤独。
二人だけの孤独。
あの日から世界は僕ら二人きり。
日本中、世界中、宇宙中どこを探しても動くもの『動物』は自分達しかいないだろう。
世界は僕らだけをここに残して、ずっとずっと遠くまで行ってしまったようだ。
太陽は真上に止まったままで、あの日以来全然月や星を見ていない。
君は今僕の隣で幸せそうに眠っている。静かに静かに、僕以外の人間を長い間見ていなかった君は、いったいどんな光景を脳内に映し出しているのだろう。たくさんの動物？たくさんの静物？真っ青な青空？真っ黒な夜空？僕にはわからない。
たとえ君がどんな夢を見ていようとわかりやしないが、
もう一度、もう一度君以外の動物を見てみたいと思う。君だってそうだろう？
僕は髪の毛の筋をなぞるように君の頭をなでた。いつになったら見れるかな？いつになったら僕らは孤独を感じなくなるかな？僕らの『連帯欲』は、何年たっても収まらない。
ここに来る前に言われていた『人間の三大欲求』は、「食欲・性欲・睡眠欲」だった。しかし、長年この世界に立ち尽くしている僕達の『人間の三大欲求』。この世界では通用しない。
もう僕たち以外に人間はいないのだから、これから説くことは僕らだけの常識だ。

我ら『人間の三大欲求』は「睡眠欲・連帯欲・帰還欲」、この三つである。

君と僕で決めた新しい三大欲。
『睡眠欲』、自分達の脳内の記憶整理のために必要な、ここに来る前からあった『欲』である。
『連帯欲』、以前当たり前のように周りにいたたくさんの人々。それがある日突然いなくなり、僕らはむなしい心境におちいった。あれから僕らは孤独を感じたくない。そんな気持ちの『欲』。
『帰還欲』、やはりこの世界から元の世界へ帰りたいという『欲』だろう。そして、これが永遠の宿命になるだろう。
以前あった三大欲求の『食欲』と『性欲』は、この世界においてもう無くなったと言っていい。
『食欲』、体中に回る栄養量のエントロピーの増大がこの世界では静止している状態であるため、食物および栄養をとる必要はない。
しかし初めてこの世界にやってきたときは、僕はコンビニのおにぎりを食べた。だがそれは、「食欲がある」状態ではなく「食べなければならない」という、食べておかないといつかは倒れてしまうからという使命感である。ちなみに食べたものは便として体外に排出される。その後、便が出てきた。しかしそれはこの世界に来る前の便であり、今回食べたおにぎりは数日後、口で咀嚼された状態で出てきた。
『性欲』、僕たち以外の動物がいない。自分の持っていた種も例外なく、存在しない。この『欲』もどこか遠いところへ消えてしまった。
エントロピーとは。比喩で例えると、グラスの半分に青色の液体が入っていたとしよう、その中に赤い液体を同じだけ入れたとする。これをしばらくほおっておくと、時間の経過によりこの混ざり合った液体は紫色の液体になるだろう。これが逆戻りして、赤と青の液体にわかれることはあり得ない。これがエントロピーの増加の性質である。
しかしこれは僕らが以前いた世界の話だ。今の僕らの世界はただ

単に青い液体に赤い液体をかけたところで時間の経過で自然と紫色になったりはしない。僕らがその液体を直接混ぜることで、その液体は初めて紫色になることができる。僕ら『動物』だけがそのエントロピーを増加させることができる。

この世界に来て数日後、僕はさっき自分がした便を見てあることを思った。

この僕、『動物』の中にいた『動物』、微生物もいるのかな。

もし僕自身丸ごとこの世界に移動してきたのならば、僕の体の中にいた微生物も『僕』とは言えないだろうか。

思い立ったが吉日。

僕はすぐに実行に移した。

僕はトイレに便を放置し、家の外にある自転車に乗ってすぐに学校へ向かうことにした。微生物を見るのに、顕微鏡を使うのは必須である。

君は一人じゃさみしいからという理由で二人で僕の家に住むことになったのだが、君はお母さんの部屋で閉じこもったまま、しばらく部屋から出てこない。前こっそり　ドアを開けて隙間からのぞいてみたことがあった。君は部屋の窓からずっと青い空を見続けていた。流れる時間を忘れていつまでも見つめている。

その時、君は僕がのぞいていることに気付いたのか、僕の方に駆け寄ってドアを勢いよく閉めると、カチャリという音とともに部屋の鍵をかけてしまった。

君は全く部屋から出てこない。

そして僕が学校に行っても君はそこから出てこないだろう。

彼女に気付かれないよう音を立てずに玄関へ行き、靴を履いて外に出た。ドアをゆっくりと閉め、外に放置してあった自転車にまたぎ、僕は学校に向かって走り出した。

信号のライトはつかなくなっていた。しかしもうそんなものは必要ないので気にすることはない。車も歩行者もいない中で信号を守ろうなんて時間の無駄である。

車道の中心を走る僕は、とてもすがすがしい気持ちだった。狭苦しい歩道を走り安全なスピードを保つこともなく、大きい車道を走り全力で走ることができる。

気づけばもう学校の門の前まで来ていた。僕は門のそばに自転車を止め、その門を見つめた。

学校の門は鍵をかけられていて閉まっていたが、よじ登れば簡単に乗り越えることができそうな高さだった。

鉄の門をよじ登り、校内に侵入した僕はどこから校舎内に入ろうかと考えた。

一応全部の昇降口は確認してみたが、すべて閉まっていた。僕はとりあえず一階の窓のどこかが開いていないかと思い、校舎の周りを一か所一か所探していった。

すると、一階の隅にある1年4組の後ろの窓があいていることに気付いた。僕はそこの窓を開け中に入った。

たくさんの机といすが並ぶこの部屋を無視して、教室の後ろのドアのロックを外した。

ドアをスライドさせ廊下に出た僕は、歩いて職員室前に向かった。誰もいない学校を歩くのは初めてで、なんだか不思議な気持ちである。

たくさんの教室が並ぶ道の向こうに、『職員室』と書かれたプレートが見えた。

職員室前にはこの学校のほとんどの教室の鍵がドアの板に掛けてあり、その中に理科室の鍵もあった。理科室の鍵を少しばかり頂戴すると、僕は理科室へ向かった。

理科室は職員室のすぐ向こう側にあるので、少し歩いただけで理科室の入口の扉の前まで来れた。鍵穴にさっきいただいてきた鍵を差し込む。ゆっくりと右に回し、半回転したところでカチッと鳴っ

た。廊下に、校舎全体にその音が静かに響き渡る。
中に入ると、通常の教室の2倍くらいの部屋に黒い大きな机が１０つあった。一つは黒板の前に横向きに置かれ、あとは3列に縦方向に並べられている。9つの机の周りにはそれぞれ左右に2つづつ、計4つの背もたれなしの椅子が並べられていた。いつもの風景である。
教室の一番奥の棚には、スタンドや電源装置が置かれていた。僕はそこに近寄り、中から顕微鏡を一つ取りだしてみた。
若干重さを感じる顕微鏡、帰る途中に壊れないかな。
まぁでも、壊れてもいくらでもあるからいいか。
そう思い、自分は家に戻ろうとして振り返った。
「うわっ！」
思わず声が出てしまった。
僕のすぐ後ろに君が立っていたのだ。
君は光のない瞳を僕に向け、真顔で言った。
「どうしたの、こんなところまで一人で来て。」
僕は少し焦った。自分の便を調べるなんて口が裂けても言えやしない。
「ええと…大きい動物はいないかもしれないけど…小さい動物、微生物ならいるんじゃないかなぁ…って。」
君の顔は1ミリも変化しない。いつ部屋から出てきたんだろう。もしかして僕が寝ている間に抜け出してきたのかな。
「そう、草や植物は調べないの？」
あぁそうか、植物も生き物だよね。
「あぁ、それも調べてみるよ。」
僕がそういうと君は、
「…手伝おうか？」
といって君は僕の横をすり抜けて、棚から顕微鏡を取り出した。
「あっ、大丈夫。一人でやるから。」
調べるものは植物だけじゃないし。そういうと、君は僕を少し見

つめたあと、手元にあった顕微鏡を元の位置に戻した。
…あれ？よくよく考えてみれば、どうして彼女はここにいるんだ？
「ねぇ…あの、どうしてここにいたの？」
君は眼をそらしたまま、
「…暇だから。」
え？
「……部屋の中にいてもやることがない。」
やっぱりそうか。確かに君はめったに部屋から出てこなくなっていたから、気づかなかっただけかもしれないけれど、
「あなたに気がついたのは、あなたがここの鍵を開けた時。きれいに響いたわ、『カチン』て。」
それよりも…本当に暇つぶしなのかな…、やけに君のズボンのポケットが膨らんでいるように見える。
「まぁ正直その音に気がついた時『あなた以外の人だったら』と、少しは期待したんだけどね、やっぱり現実はそんなに甘くないわね。」
そのポケットから何かが飛び出ている。
「ねぇ、じゃあさ。」
君の死んだ眼が僕を見つめる。
「…何よ。」
僕は指をさして、
「それ何？」
ポケットから細いコードがはみ出ているのが見えた。理科の実験用の黒や赤コードとは違い、白色のコードだった。
「ねぇ、それ何に使うの？」
君は落ち着いた様子ではみ出たコードを入れなおして、
「……うるさいわね。」
と言い残すと、君は小走りで教室から出て行ってしまった。
「あっ…。」
本当にどうしたんだろう。

僕と同じで君も何か確かめたいことでもあるのかな？
けど僕は少し気に掛けながらもやるべきことを進めた。
黒板の横にある引出しの中から、スライドやスポイトなどを用意して、教室内にあったチャックつきのポリ袋に入れた。中身を確認してチャックをふちからスーッと閉めると、僕は服のポケットに入れた。
教室を出て鍵をかけようとしたが、また来た時に面倒なのでそのまま放置した。君以外誰もいないんだから用心する必要なんてないだろう。
鍵は職員室の前に掛けておいた。家に持って帰っても無駄で、元あった場所に置いといた方が万が一の時に困らないだろう。
また１－４の教室の窓から出るのは面倒なので、廊下を渡り昇降口まで来た。げた箱には靴一つもない。僕は昇降口の鍵を開けて、精いっぱい扉を押した。案外重かった。これでいつでも校内には入れるだろう。
校門は閂のようなもので閉まっていて、その閂の長い棒をスライドさせてやれば簡単に開くようになった。
門のそばに置いてあった自転車のかごに顕微鏡を入れた。ポリ袋も一緒に入れておくと顕微鏡とぶつかり合って壊れてしまうので、少し違和感があるがポケットに入れたままにすることにした。
自転車にまたがろうとした時、緑色の物体が目に飛び込んできた。
芝生の草だった。
いつもそこにあるのが当たり前すぎて、気にもかけたことのない存在だった『植物』。なにげに踏みつぶしたり、引っこ抜いたり。本当は僕らと同じ、『生き物』であるのは変わりないのに。何か、申し訳ない。
僕はその場でしゃがんで虚ろな目でそれを見つめた。
少しためらったが、少しその芝生の一部を引きちぎった。茶色い荒れた地面が姿を現す。
僕はそれをさっき持ってきた実験用具の入ったポリ袋に入れ、も

う一度ポケットに詰めた。
僕は自転車にまたがり、ゆっくりとペダルを漕ぎ出した。
ゆっくり走らないと籠の中で顕微鏡が壊れてしまう。
壊れてもそれはいくらでもあるけど、やっぱりあとで取りに帰るのはめんどくさい。

家に着いた。
自転車を止めて、顕微鏡を抱えて家に上がる。
とりあえず顕微鏡と実験用具をリビングの机の上に置いた。
君の部屋を確認してみたが、まだ君は家には戻っていないようだ。
僕はすぐにリビングに戻って、キッチンの食器棚の中にあったコンビニでもらうようなアイスを食べるための木の棒を取り出した。
そして僕は両手にゴム手袋をして、木の棒を手に構えた。
（なるべく君が帰ってくる前に終わらせなければ。）
僕は便器に手を突っ込み、便の一部分をすくい取った。
自分でもこれをやるのは正直つらい。
吐き気がしそうだった。
しかし君以外の『動物』を見つけるためにも、なんとかしなくてはならない。
僕は椅子に腰かけ、作業に取り掛かった。
さっきトイレからとってきた汚物を、ためらいながらもそれをスライドに少しつけて薄く伸ばした。
水をかけたら、ドロドロになってさらに気持ち悪くなりそうなので、あえて書けずにカバープレートをのせた。
僕は完成したプレパラートをステージの上にのせて、レンズからのぞいた。
暗くてよく見えない。
明るさを調整。
ぼやけてよく見えない。
ピントの調整。

だいぶ見えてきた、少しズーム。
また暗い、調節……
その繰り返し。
だいぶ高倍率になってきた。
これぐらいの高さなら見えるだろう。
僕はピントを合わせた。
けどどれだけ合わせても菌は見えない。
大腸菌とまではいかなくても、何かの大きな細菌ぐらいはいてもいいだろう。
隅から隅まで探した。
けどどこを探しても見つからない。
（もしかして、本当に僕ら以外の『動物』はいないのかなぁ…）
僕は背もたれに全体重を預けて天井を見た。
（…いや、きっと学校の顕微鏡じゃ倍率が小さかったんだろう。植物なら、植物なら1学期の実験で、この顕微鏡で細胞を見ることができた。）
自分は思い直した。便にいる細菌は小さすぎたのだ。学校の顕微鏡では見ることはできなかったのだ。
自分は便のプレパラートをゴミ箱に投げ入れ、植物のプレパラートを作ることにした。
僕はもう一つ、袋からスライドを取り出そうとした。
その時だった。
ガチャリ、と玄関の方から音がした。
彼女が帰ってきたのだ。
僕はリビングから玄関を覗くと「おかえり。」と、声をかけてやった。
君は小さな声で「ただいま」といい、靴を脱いだ。彼女は右手に小さな袋、左手に　大きな布を抱えていた。
「…どうしたの？…それ…。」
僕がそう問いかけると、

「…別に。拾ってきただけ。」
と、適当な言い訳をして部屋に戻ってしまった。
拾ってきただけ、彼女は何のために拾ってきたのだろう。白いコード、大きな布、袋に入った何か。あれが一体何に関係があるのか、僕には全く見当がつかなかった。
（……後で聞いてみよう。）
君はまたしばらく部屋から出てこないだろう。今聞いても君は答えてくれない。
それよりも今はやるべきことがある。
彼女が教えてくれた『生き物』のしるし。
もしこれが本当に『生きている』ものだとしたら、世界は僕らだけではないということになる。
どうしても証明しなくては。

もうあれから何年経っただろう。
机の上にある紙の束。
その紙には一枚一枚たくさんの『正』が書いてある。
僕は夢から覚ますごとに『正』の一画だけを紙につけ足してく。
だけど、それを毎日毎日続けていくとここまでも紙の束は分厚くなってしまうのだろうか。
僕と君の『毎日』の時間は曖昧かもしれないけど、それでもなかなかの厚さだった。横に暇つぶし用の３００ページくらいの本をおいてみても、それの優に2、3倍ぐらいはあった。
今までの日数を数えてみると面白そうなことになりそうなので、自分はリビングから電卓を持ってきて計算してみた。
画面に表示されるデジタル文字、その横には気が狂ったように『正』の書かれた紙の束。紙と電卓のにらめっこ。
紙一枚に書いてある『正』の数は、両面合わせて４５０ぐらいだ

った。紙の枚数は…数えるのがめんどくさいなぁ。ええと……。

ふぅ、大体８００枚ぐらい…かな？
僕はその数字をまた電卓に打ち込む。
僕はイコールボタンを押す。
出てきた数字はとんでもなく大きい。でも驚きやしない。

『　　１８０００００』

年数に換算すると５０００年ぐらいか、もうそんなに立ったんだね。
そのうち何年君はずっと一人ぼっちだったんだろう。そのうち何年僕は一人ぼっちだったんだろう。
本当に僕ら以外の『生き物』といえるもの全て消えてしまった世界。
それだけはあってはならないと、ずっと昔に植物の細胞を調べようとしたときは本当に驚いた。
あっちの世界では見ることのできた命の証『細胞』が、全く見えないのだ。
最初はただぼやけているだけかと思ったが、どれだけピントを合わせようとしても緑色の世界しか見えない。その時は顕微鏡が壊れてしまったと思い、また学校に戻って新しい顕微鏡を使った。持って帰る途中で何か壊れるきっかけを作らないようにと、その場で観察した。けど結果は同じだった。
なんで見れないの？なんで見れないの？
僕は焦っていた。
細胞のない植物は生きていると言えるの？
そんなばかな。

僕はすぐに校舎を飛び出して、外の花壇にあったホウセンカを引っこ抜いた。そして家に戻り、食器棚からガラスのコップを取り出した。コップに水を注ぎ、そこにさっきの花を挿す。

僕は毎日毎日観察し続けた。

けど１０日たっても２０日たっても、１ミリも伸びやしない。いつまでたっても写真のように同じ風景がそこにあるだけだ。

僕は花瓶代わりのコップを弾き飛ばし、僕はその場で失望し、大声で泣いた。

この植物は生きていない。全部の植物は生きていない。小さな『生き物』もどこにもいやしない。

これらは『生き物』なんかじゃない、たんなる『物』。

床に散らばるコップの破片と同じ、『物』

いつか元の世界に戻れたらいいのに。

こんな孤独な世界から、生き物が腐るほどいる世界に。

いきなり僕らはこの場所に現れたんだ。そのうちまたいきなり元の世界に戻れるような気がしてままらない。

けど、仮に戻れるとして、いつ戻れるの？

明日？明後日？それとも、１００年後？

下手したらもう永遠に戻れないかもしれない。

僕はこの不条理に腹を立てた。

透明な破片の中にいっしょに散らばっている、緑色の『物』を精いっぱい踏みつぶした。

何回も何回も踏みつぶして、緑色の『物』はペチャンコになっていき、その上に赤い色素が塗りたくられていく。

足の痛みなんて感じない。どれだけ刺さろうとも関係ない。それよりも、僕は心に刺さったガラス片を取り除いてほしかった。

今もガラス片は刺さったまま、心の傷はいつまでたっても癒えやしなかった。

僕は何年たってもこの世界から抜け出すことはできない。

もう、刺さったままここで過ごすしかないのかな。

君の心にはいくつ傷がある？
僕よりも多いかな？少ないかな？

君はまだ夢の中。
さて、今日は何をして過ごそう？

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2218z/

世界は二人きり…？

2011年12月7日23時53分発行